





T-VI レース

# クリア快勝



モーターファン待望の第二回日本グランプリ自動車レース大会（JAF主催・FIA公認）が去る五月二、三日の両日にわたって、三重県の鈴鹿サーキットで開催された。昨年の五月に第一回大会が行なわれてからちょうど一年目、この間に出場選手がみつかり練習を積んだせいか、昨年とはうつてかわったレース展開で、選手の実力がいすれも伯仲しており、車のもつ性能が勝負の分かれ目となるレースだった。

大会第一日の五月二日午前八時三十分、大会名譽総裁の高松宮殿下が紀賀下と会場におつきになり、開会式が始まる。すでに観戦者がつめかけ、グランドスタンンドも人で埋まり、ダブルスタンドやステラミナ城の觀戦席も人で埋めつくされている。一方花火が打ち上げられる中を米軍岩国第1海兵隊音楽隊がマチ子を奏でながら行進、そのうしろには第一回大会の優勝者が続いている。グランドスタンンドから期せずして拍手がわき、昨年の観客達が手を振つてこたえる。

音楽隊が整列して君代を吹奏するうちに日の丸の旗がセンター

ポールに高々と掲げられた。高松宮殿下が「この大会が、内外にわが国自動車についての認識を深めると共に、国際親善に役立つことを祈つてやみません」とご挨拶。つづいてFIA会長カラチ

オロ公爵のメーリージがあり、名誉大会会長川又克二氏、JAF幹事長などが挨拶に立ったあと、選手代表の横山達（プリンスチーム）選手が「スポーツマンシップにのっとり正々堂々たかいたみの城の觀戦席も人で埋めつくされ、そのとき花火が大空に散り、その爆発音がこだまとなつて鈴鹿の山にきえて行く。何千となくとりどりの色風船が舞い上り、大会の雰囲気が最高潮となつた。

開会式が終ると待ちかねたよう

に、パドックでガウゴウと掛け声が響きはじめる。第一レースの音が響きはじめる。

ツーリングカーIV（—100—1—300cc）のスタートである。パ

ドックでは最後の調整に分秒をお

しんであわただしくメカニックが走りまわっている。

九時四十分、いまよ第一レースのスタートである。待ちに待つた熱戦が火ぶたを切つておとされ

たのである。



開会式終了と同時に花火が打ち上げられ、数千個の風船が舞つた



第一日の最大の呼び物として興味をひくレースである。スタート前に場内放送が「みなさまじみの深い車が出場します」とアナウンス。この日の本命レースであることを告げれば、場内のみならず競争心ももり上り、日頃自分の使っている車がどんなに健闘するか期待と興奮につつまれた。

ツーリングカーVI  
(JAF公式記録)

1,600~2,000 c.c. 20周 約120km

順位	ゼッケン	氏名	年令	所要時間 時 分 秒	平均速度 km/h	周回数	車名	排気量 cc
1	39	大石秀夫	26	1-00-10-6	119.730	20	グロリアス-バ-6	1,968
2	38	杉田幸吉	29	1-00-16-9	119.521	8	ク ラ ウ ン	1,897
3	29	式場吉壯	25	1-00-25-9	119.325	8	ク ラ ウ ン	1,897
4	37	横山利透	31	1-00-30-9	119.061	8	グロリアス-バ-6	1,968
5	51	寺吉幸弘	30	1-01-12-7	117.705	8	ク ラ ウ ン	1,897
6	32	多賀原義彦	30	1-01-25-3	117.303	8	ク ラ ウ ン	1,897
7	25	北島亮彦	27	1-01-36-0	116.953	8	ク ラ ウ ン	1,897
8	12	滝口豪志	31	1-01-44-5	116.695	8	ペ レ ル	1,991
9	36	古賀平誠	25	1-01-53-7	116.406	8	グロリアス-バ-6	1,968
10	2	鈴木誠宣	27	1-01-59-0	116.240	8	セ ド リ フ ク	1,883
11	44	殿井行一郎	28	1-02-15-2	115.736	8	グロリアス-バ-6	1,968
12	7	田中健二郎	30	1-02-32-3	115.209	8	セ ド リ フ ク	1,883
13	6	前田一善	28	1-00-33-0	113.042	19	ク ラ ウ ン	"
14	18	大前利男	24	1-00-38-3	112.877	8	ク ラ ウ ン	1,897
15	1	高橋義朗	32	1-01-05-2	112.049	8	セ ド リ フ ク	1,883
16	5	立石義伸	25	1-01-05-7	112.034	8	ク ラ ウ ン	"
17	3	井口由紀子	37	1-01-30-6	111.278	8	ク ラ ウ ン	"
18	16	ケイエス・D・スイッシャー	44	1-02-31-6	109.468	8	ペ レ ル	1,991
19	24	桑原彰	23	1-04-17-3	106.469	8	ク ラ ウ ン	1,897
20	27	田村三夫	31	1-07-57-2	106.726	8	ク ラ ウ ン	1,897
21	15	吉川泰三	26	1-00-13-6	107.667	18	ペ レ ル	1,991
22	8	服部信義	28	1-01-30-2	93.718	16	セ ド リ フ ク	1,883
23	40	須田義雄	21	37-04-0		12	グロリアス-バ-6	1,968
24	43	須田義弘	24	30-27-1		10	ク ラ ウ ン	1,897
25	41	砂田義裕	31	24-48-9		8	ク ラ ウ ン	1,897
26	46	ブライアン・ルイス	27	25-13-2		8	ペ レ ル	1,991
27	26	戸田盛弘	27	27-52-7		6	ク ラ ウ ン	1,897
28	33	渡辺義謙	28	1-07-50-0		3	グロリアス-バ-6	1,968
29	28	相坂六三	32	3-28-5		1	ク ラ ウ ン	1,897
30	30	相谷四方洋	26			0	ク ラ ウ ン	"

最高ラップタイム

35

2-57-8 121.568

2-8-6



1位と2位の車はレース終了後  
まず台秤の上にのってウエイト



該格に分解検査される  
検査からはじめられる



朝 準備体操するプリンステーム

レ  
ー  
ス  
經  
過

えんの下の力もち 勝利のかけにはメカニックの努力が光っている

の第一「グループ」が激しく追いあけ  
通過、約二十七秒の間隔で六台が一  
ヶ一同と走っている。早くもトップと最下位15  
との差がついてしまった。  
そのままの順位でトップグル  
ープの五台が第一「グループ」と五百五  
号との差をかけて走り、七周、八  
周とどんどんスピードが上る。八  
周目では第二「グループ」の内側の谷へ  
転落した車も出、ますます激烈な  
レースとなってきた。  
レースとなってきた。  
スタート目をまわりきつてグランピ  
ントン前を通すと、今まで二位にいた43の須田選手の車  
が脱落していく。須田選手はどうや  
ら不調でレースを放棄したよう  
である。15のベルモも振わず、と  
うとう三位までに一喝みかれてし  
まった。  
一周目が終り十二周目、39、  
38、29、37が快調に速いペースで  
レースを運んで行く。この四台が  
グランピントン前を通じて第  
一位の38と三位の差が約三十分。三  
位の式場選手連軸のクラウンを37  
のクロリア（横浜アーバン）が激しく  
追いあげ、その差は十秒とい  
う快調。十四周目に入るときには  
さつと五六十位引きはな  
39がほんと独走態勢をしき、二  
位の38と三位の差が約三十分。三  
位の式場選手連軸のクラウンを37  
のクロリア（横浜アーバン）が激しく  
追いあげ、その差は十秒とい  
う快調。十四周目に入るときには  
さつと五六十位引きはな

レース経過 TBC二〇〇四回二〇キロ  
スタート前、ハドックから次々と出場車が姿をあらわす。  
ピット前に、列に整列。コースを半周してスタートラインへむかう。  
グロリア九台、クラウン十台、セドリック七台、ペレル四台の合計三十台というマニアーズである。  
スタート順位は、公式予戦のラップタイムの速い者から順に三台、二台、三台、二台……と並ぶ。前二列(八台)がすべてグロリアで、その後にクラウン、セドリック、ペレルなど続々と続いた。整列がすっかり終ったが、どうしたことかゼッケン29のクラウン(式場社長選手)が姿をみせない。  
四分前、エンジン停止のサインがかかる。そのときようやく式場運手がパドックを出て、スタートラインにむかう。三分前……二分前、いっせいにエンジンをスターとさせる。ゴウゴウと排気音がひ

していた。四台のトップグループは、一回遅れの車とともに完全に差をつけたままの順位で快走。十六周には各車の間に一回遅れの車をはさみ、それが上位で、それが一回遅れかわからないほど入り乱れに入る。**39**、**38**、**29**と通過。**37**が**29**に百回の差で猛追。そして山かけに姿を消す。はたしてどんな順位でブールに入るか? 場内放送が「アビンの通過を告げている。

**39**、**38**が通過。すぐに**29**もヘアピンに入ります。**37**の横山選手が**29**に接近しております。はたして横山選手が式場手をぬけるでしょうか? ああ? ……ぬけませや! やりにぬけずに今へアビンを通過しました!

ゴーラインの前にチエツカ一が立ち、最終カーブの丘の裏から。突然ゴーラインをあわらせ、チエツカ一族が大きく振られ、まだ振りやまぬうちに**38**もゴーライン。そして九秒遅れて**29**がゴーラインへ殺到、そのあとを**37**が狂ったようなスピーディーで追っている。しかし、**29**を下すを大きく引きはなしていた。このレースで二十周完走したのは三十台中の十三台だけ。他は一周二周おくれとなつた。

んで行く。スタートしてから三分钟で最終カーブをまわってグランピングスランド前に姿をあらわす。

43、40、38、39、29、32……まったく目まぐるしいスピードで走り去つて行く。

一回目はやくも第一カーブとスブーンでスピンドルをおこした二台がレースを放棄。(二〇周の波乱を予想させる。)

二回目、43が依然トップで通過。二位は40にかわつて38がとり、40、29、39と続く。26は走行装置のトラブルでピットイン。

三回目、スブーンで三位を走つていた40がハンドルをきりそこねて十二位にさがつてしまつた。入れかわつて29の式場選手が三位に上り、快調にコースをまわる。ピットインする車が目立つて来た。

五回目を43と39のクローリアがトックリ争いを演じ、約二百㍍差がトックリ37……と続く。43と39で独走トップを39が走り43が二位。前回



リヤフェンダーに激戦の跡なまなましい優勝車 快速を駆って最後の追い込み



ゴールした生沢選手にヒゲのメカニックがかけつけてがっちり握手

第一日のグロリアの快勝と第二日の午前中に行なわれたGT IIレースで堂々ボルシエカラ九〇四にわたりあつたスカイラインGTの圧倒的な強さを見せられた観衆は、このレースでもやはりブリニス勢の圧勝を信じて疑がわなかつた。

この一戦で、二日間にわたった第二回日本GPレースが終了である。第一日目とはうつてかわった天候どんどんより空が曇り、冷たい風がグランドスタンドを吹きぬけて行く。それでも十七万余の大観衆は、この最後の一戦を見んものと、スタートを待ちわびている。



ツーリングカーV  
(JAF公式記録)

順位	ゼッケン	氏名	年令	所要時間 分秒	平均速度 km/h	周回数	車名	排気量 cc
1	31	生沢 健	21	44-45-6	120-726	15	スカイライン1500	1,484
2	30	杉田 幸一	29	44-46-3	120-695	*	*	*
3	27	大石 秀夫	26	44-46-6	120-681	*	*	*
4	29	砂子義一	31	44-47-3	120-650	*	*	*
5	32	殿井宣行	28	45-01-0	120-038	*	*	*
6	33	須田裕	24	45-01-2	120-029	*	*	*
7	28	古平	25	45-04-7	119-874	*	*	*
8	35	高橋幸治	28	45-27-4	118-876	*	*	*
9	11	中島茂樹輝	23	45-29-8	118-772	*	ペレット	1,471
10	14	渡岡重慶	22	45-45-1	118-110	*	コロナ	1,453
11	23	浮谷東次郎	21	46-02-1	117-383	*	コロナ	1,453
12	1	吉田隆一郎	28	46-47-2	115-497	*	コルチナロータス	1,558
13	12	ブライアンルイス	27	46-49-5	115-402	*	ペレット	1,471
14	24	田村三夫	31	47-17-1	114-280	*	コロナ	1,453
15	6	守屋清太郎	23	47-23-8	114-010	*	ペレット	1,471
16	21	杉江博	24	47-24-4	113-986	*	コロナ	1,453
17	20	高橋愛	23	47-45-3	113-155	*	コルチナロータス	1,471
18	19	蟹江光正	19	47-47-0	113-088	*	*	*
19	17	松尾正通	23	44-49-4	112-519	14	*	*
20	7	高瀬元	26	44-52-9	112-372	*	ペレット	1,471
21	5	岩瀬清	27	44-57-9	112-164	*	*	*
22	9	田中真	35	45-27-6	110-943	*	*	*
23	3	竹内重	21	46-56-6	107-437	*	コロナ	1,453
24	18	山田祥	25	44-35-3	105-032	13	*	*
25	16	上原康弘	27	47-37-4	98-339	*	*	*
26	22	戸田盛	44	15-54-8	5	ペレット	1,471	*
27	15	ケイエス・D・スイッシャー	23	6-57-4	2	コロナ	1,453	*
28	10	本多正	26	失格	スカイライン1500	*	1,484	*
*	25	細谷四方洋	26	失格				*
*	26	市瀬正至	26	失格				*
最高ラップタイム				2-55-0	123.513		スカイライン1500	
31 生沢 健				2-55-0	123.513			
29 砂子義一				2-55-0	123.513			



ダブルSカーブ 坂根ごしの競争者が多い



到着！ スタート直後第一コーナーへ各車が殺到



ゴールイン！ チェッカーフラグが振られ 感激の一瞬



アクロバット？ メカニックの苦労は絶えない



スタートしたとたん 第1カーブでコルチナロータスがスピンドルクラッシュがまがいの姿となった



給油ひとつにも気をつかい セーム度でごしゴミの混入を許さない



スカイライン1500で上位を占めたプリンストリオ

制することができるか 大観衆が

大いにわいた。

スタートの青信号。第一コーナー

T-1V 十五回約90キロ

ト前には次々姿をあらわし、スター

トライに向う。スカイライナー

五〇〇が九台、ペレット十台、コ

ロナ十台、コルチナロータス一

台の出走である。

スカイライナー、ペレット、コロ

ナの国産小型車が優劣をきさい

はたしていすれに軍配があがるか

またコルチナロータスが国産車を

かかられるかに迷のいてしまった。

国産車ぞいに焦点がしがらめ

て来た。また、26のスカイライ

ナはエプロソーンに入つたため

おもしろ失格となつた。

一周目 30、32、27、29、15、

30、28、11、35、23、14と続いて

グランドスタンンド前を通過。予想

通りプリンストン勢の圧倒的な強さで

ある。五位にキース・D・スイ

シャー選手のペレットがよくつい

ている。昨年の新車コロナは十位

だ。一周目のアビングトン場内放送

が告げる「30、27、29……」

いずれもスカイラインが走り去り

ます」期せずして、スタンドから

歓声が上がる。

三周目からそれまで六位にいた

島選手が11のペレット（中

位を独占、ペレット一台だけを八

位にはさんで完全な独走態勢であ

る。レースはスカイライン同士の

健闘ぶりが大いにたえられた。

車種のせりあいから興味が遠のき誰が優勝するかにじぶるわず、六回目には18のコロナがボンネットを開けてピットイン。九回目には早くも周おくれの車が出た。30、29、27、32、31、33、28と続き、スカイライナーの感をほつきとみせつけられた。十回目、18が再びボンネットを開いたようである。こんどは閉めずにそのまま走りつづける。そして16のコロナはランクが開いていた。31のスカイライナー（生沢）がアビングで30をぬき去り車が走つづける。30、29、27、32、31、33、28と続き、スカイライナーの感をほつきとみせつけられた。十回目、18が再びボンネットを開いたようである。こんどは閉めずにそのまま走りつづける。十周目、31のスカイライナー（生沢）が先ず通過。二十台ほどおくれて30、29、27、32、33、28と続く。さくら五百はどうとから32、33、28と最後の周回に入つた。いよいよオールだ。ほとんど間

優勝の生沢選手と四位に入ったリニス勢の完全勝利。砂子選手はこのレースで一周（六〇〇回）二分四五秒〇という驚異的なラップタイムを出し、その



スピントした車の間をぬけて疾走 スリル満点だ

GT-IIクラスは、ポルシェカレラ904というとてもない怪物が出場。これに昨年の覇車フェアレディと新参のスカイラインGT、ベレットGTが挑戦するレース。怪鳥のように疾走する904をスカイラインGTが7周目にぬき去るというスリルに富んだレース展開となった。ベレットGT、フェアレディ勢が意外にふるわらず、スカイラインGTがひとり気をとき、2~6位までを占めた。





よりよい車への努力を

プリンス自工技術担当常務  
工学博士

中川良一

プリンスは高級車で、しかもエンジンは優秀であると言う定評がありましたが、昨年は何の用意もなく出場したためユーザーやプリンスファンの皆様をがかりさせ



ジャガーにジャガー GT-IIIにジャガーエクスケルーペ出場した選手がペットのジャガーを披露 大変な人気を博した



この大会の吹奏をうけもつた米軍楽隊員がタンゴを披露



このヒゲ価千金 勝まではヒゲをそらない誓ひた立てたプリンスチームのメカニック



グランドツーリングカーII  
(JAF公式記録) 1,000~2,000cc 16周 約96km

順位	ゼッケン	氏名	年齢	所要時間 分	平均速度 km/h	周回数	車名	排気量 cc
1	1	式場 壮吉	25	45-29-9	126.685	16	ボルシェ・カレラ904	1,966
2	39	砂子 喬義	31	45-39-3	126.250	16	スカイラインGT	1,988
3	41	生沢 幸徳	21	45-58-8	125.358	16		
4	35	古賀 平宣	25	46-48-8	123.126	16		
5	38	黒井 勝行	28	46-58-5	122.703	16		
6	40	須田 葵弘	24	46-59-1	122.677	16		
7	20	田中 こと朗	26	47-11-0	122.161	16	フェアレディ	1,488
8	37	杉山 幸一郎	29	47-58-3	120.153	16	スカイラインGT	1,988
9	9	横山 精一郎	32	48-04-7	119.887	16	ロータスエラン	1,558
10	3	浅岡 重輝	22	48-06-0	119.833	16	M G - B	1,798
11	27	三佐 敏太郎	27	48-07-4	119.775	16	フェアレディ	1,488
12	21	石上 しょしお	25	45-35-1	118.541	15		
13	29	詹姆斯・E・ウイルソン	39	45-05-6	117.234	16		1,525
14	17	高木 敏明	29	46-06-1	117.213	16		1,488
15	33	ブライアンルイス	27	46-13-0	116.921	16	ベレットGT	1,579
16	2	松永 正義	38	46-47-9	115.468	16	M G - B	1,798
17	30	P. クロウトン	28	46-49-8	115.390	16	フェアレディ	1,500
18	24	発生川 忠成	21	47-09-9	114.570	16		
19	18	中島 達郎	34	48-01-6	112.515	16		
20	15	藤本 育介	25	46-12-7	109.138	14	トライントR4	1,900
21	23	福部 金蔵	28	27-00-9		9	フェアレディ	1,488
22	28	久世 和玄	18	29-54-1				1,500
23	25	藤井 一	29	23-52-7		8		1,488
24	36	横山 達	31	23-53-6			スカイラインGT	1,988
25	34	ケース・D・スイッシャー	44	24-44-4			ベレットGT	1,579
26	26	田中 譲二郎	30	20-47-8		7	フェアレディ	1,488
27	22	前田 一利	28	22-16-5				
28	32	中島 茂樹	23	18-18-7		6	ベレットGT	1,579
29	19	井口 のぼる	37	18-25-6			フェアレディ	1,488
30	16	真木 喜久雄	38	4-35-6		1	ロータスエリート	1,216

最高ラップタイム  
1 式場 壮吉 2-48-1 128.351 ゴルシエカラ904



昨年はヘアピンやスプーンで事故が続出したが、今年は車の性能が上がってホームストレッチでスピードが出すぎるせいか、第一カーブでのスピン事故が多かった。



プリンスグラフ別冊／第2回日本グランプリレース特集  
昭和39年5月10日印刷 昭和39年5月13日発行  
発行／プリンス自動車販売株式会社  
販売促進部広報課

東京都港区芝田町5の16 TEL(452)2151(大代表)  
印刷／千代田グラビヤ印刷社

米軍樂隊から三重県の厚生施設へステレオが贈られた 日米交歓の一暮

はなやか

レースのかけでクリッパーが活躍していた



1位から8位まで独占したスカイライン1500が1団となってグランドスタンド前を通過する。ピット要員が飛び出して、それぞれの車にサインを送り激励する。